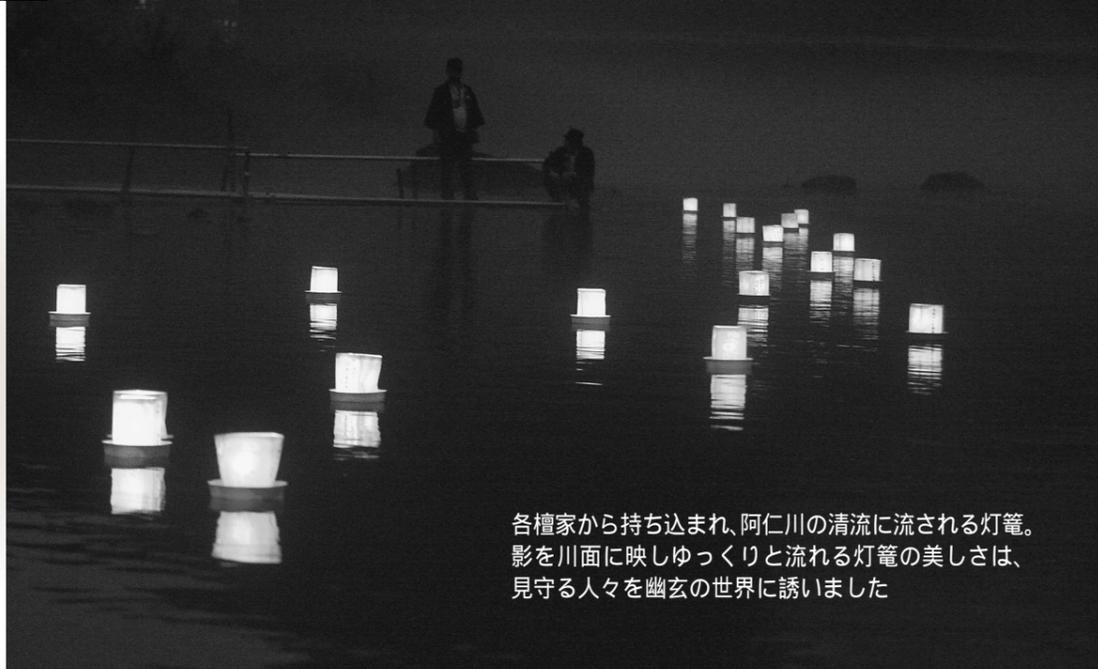


灯笼流し・まと火・供養踊り



各檀家から持ち込まれ、阿仁川の清流に流される灯笼。影を川面に映しゆっくりと流れる灯笼の美しさは、見守る人々を幽玄の世界に誘いました

盆踊り、郷土芸能、花火大会。祖先の霊を慰めるとともに、地域住民の楽しみの一つともなっている北秋田市のお盆行事。8月13日から16日にかけて、各集落・町内でさまざまな行事が行われました。このうち、多くの帰省客なども参加し楽しんだ「阿仁の花火と灯笼流し」「合川まと火・合川ふるさとまつり」の様子をご紹介します。

花火と灯笼流しで先祖供養

阿仁地区のお盆行事 第45回阿仁の花火と灯笼流しは8月16日、阿仁・河川公園で開かれ、市内外から訪れた約2万人の見物客が灯笼の光と夜空の花火が織りなす幽玄の世界に浸りました。

もともと、戦後に始まった灯笼流しだけの送り盆行事でしたが、昭和38年からは花火も打ち上げられるようになり、遠方からも見物客が訪れる地区の一大観光イベントとして定着しました。灯笼流しは、阿仁仏教会灯笼流

し奉賛会梅井繁司会長)が中心となつて開催されており、夕方から会場入り口付近に設けられた仮設の祭壇で、祖先の霊を招き供養する儀式「一代供養」が行われました。

セレモニーには各宗派のお寺の檀家代表と住職らが参加、僧侶による読経と焼香で祖先の霊を供養しました。あたりが芳香の匂いと読経の響きに包まれる中、灯笼流しが始まり



雨模様だった当日のお天気、それでも見物客は、会場内や付近の高台に陣取り、最後まで花火を楽しんでいました

各檀家から持ち込まれた灯笼が係員の手で阿仁川に一つづつ流されました。夕暮れの薄明かりの中を川面に影を映しながら灯笼がゆらゆらと流れ、川辺で見守る見物客からもその幽玄な美しさを堪能していたようでした

山間に共鳴する花火の響き

花火大会では、4号から6号の割り物花火、色とりどりのスターマイン、造形花火など約4千発が打ち上げられました。川幅約100mほどの阿仁川をはさんで対岸から打ち上げられる数々の花火は、特に音が山間に共鳴し迫力満点。見物客らは、美しい灯笼絵巻と山峡にこだまする花火との競演を、ファイナルまでじっくりと堪能していました。

帰省客も楽しむ地域イベント

一方、「第36回合川まと火」「第7回合川ふるさとまつり」は8月14日、合川橋付近と合川公民館付近を会場に開催されました。「万灯火」は、古くから小阿仁川

流域の合川・下小阿仁地区や上小阿仁村で行われている春彼岸の伝統行事で、国記録選択無形文化財に指定されています。同地域では、墓地に灯かりをともすとともに、山の尾根づたいや沢づたい、あるいは川原にたいまつを灯し先祖の霊を我が家に迎えてもてなし、供養とともに豊年満作、家内安全を祈ってきました。現在では、帰省客でふるさとがにぎわうお盆の14日、「合川まと火」

各世帯、中学生も参加・協力

が行われています。合わせて華やかな夏祭りを演出しようと、「通り踊り」や「タント節」など地区内の郷土芸能を集めた、合川ふるさとまつりがお盆を盛り上げます。

「まと火」の灯りのもとは、タンポと呼ばれる布切れを丸めたものに灯油をしみこませたもの。合川地区の全世帯で1個ずつ作られ、中学生の協力を得て阿仁川堤防約2kmにわたり設置されます。会場となった阿仁川堤防では、午後7時30分、中学生の手で点火され、合川橋を挟み堤防約1.5kmにわたり炎の列でかたどられたラインや文字が浮び上がりました。川面に映るまと火は幻想的な



「わら打ち唄がもとになったとされる合川地区の郷土芸能「タント節」

光景を一層引き立てていました。また、今回の仕掛けまと火には、「まと火スギッチ」が登場し、合川橋から記念撮影する人も多く見られました。

公民館前で行われたふるさとまつりでは、アマチュアバンドの演奏と、合川太鼓保存会による呼太鼓で始まり、婦人会と合川中女子生徒約250人による華やかな通り踊りが観衆を魅了しました。このほか、わら打ち唄がもとになったとされる合川地区の郷土芸能「タント節」も披露され、大きな拍手が送られていました。

合川橋から見える「まと火」の光景。今年は秋田わか杉国体のキャラクター「スギッチ」も登場



車まと火



婦人会・合川中女子による通り踊り



中学生も協力し、設置したまと火の仕掛け